

第3章 鬼が主人公！日本各地のあまんじゃく昔話④

天邪鬼が神や自然、人に反抗し、逆らおうとする昔話は、だいたい天邪鬼の失敗に終わります。先の『うりこ姫とあまのじゃく』、『アマンジャクの星とり』の話がその例です。

しかし、中には、天邪鬼の「反抗し、逆らおうとする」性格を読んで、人々の生活に恵みをもたらさせた話もあります。

◆あまのじゃくの雨ごい

【あらすじ】

“昔、ある年の夏、ひどい日照が続き、困った農民は雨ごいをするようになった。その雨乞いに小松原に住むあまのじゃくという怪物を利用することにした。あまのじゃくをつかまえ、首に紐をつけて阿知川の川原へ引っぱって来て、農民たちが「雨が降らん」というと、あまのじゃくはすぐに「雨が降る」といったという。あまのじゃくが農民たちに反対しているやいなや空はにわか曇り、車軸を流すように大雨になったという。そのあまのじゃくをかたど象った木像を作って松源寺に祀っており、今でも、日照の続き時にはこれを出して雨ごいをするという。”

(下條村誌編集委員会.昭和 52 年.『下條村誌』.下條村誌刊行会.P1408 より引用)

この『あまのじゃくの雨ごい』を元に、子どもたちに村の民話と伝説をより詳しく伝えようとして作られた話が次の『松源寺の天の邪鬼』です。

◆松源寺の天の邪鬼

【あらすじ】

“極楽山松源寺に祀られている天の邪鬼のお話です。

小松原の人たちは、山の間からわき出る小川といくつかのため池で、お米や野菜をつくって暮らしていました。

ある年のことです。

田植えの時期が来ても雨が降らない日がつづきました。水路の水もなくなり、ため池の水も空になってしまったのです。

このまま雨が降らないと、食べるお米も代官様に納めるお米も採れなくなってしまいます。

ある晩、このままでは食べるものがなにも採れなくなってしまうと、皆で庄屋の家に集まり、雨を降らせる方法はないかと知恵を絞りました。

すると、一人のおじいさんが言いました。

「松源寺の天の邪鬼は、とてつもない力を持っていると聞いたことがある。雨が降るように天の邪鬼に頼んでみたらどうずら」

次の日、松源寺の毘沙門天の前に、庄屋さんを先頭に村人たちが神妙な顔をして集まりました。乱暴で計り知れない力を持つと言われる天の邪鬼は、毘沙門天の足で、暴れないようにしっかりと押さえつけられています。

村人たちは、和尚さんのお経が終わると、天の邪鬼を荒縄で縛り阿知川へと向かいました。

阿知川のその場所は、人が二十人で抱えても抱えきれないほどの黒い帯模様のある大岩と淵がある、『帯岩の淵』と言われるところでした。

庄屋さんは、皆に、小さな声で、

「これから天の邪鬼に雨を降らせてもらうようお願いをするが、天の邪鬼はあべこべに願いを叶えてくれる。本当の気持ちを口にしてはだめだ」といって帯岩の上に立ちました。

「天の邪鬼様、これからお願いをします。どうか雨を降らせないでください」と手を合わせ、「雨はいらない」「雨は降るな」…と唱え始めました。

村人たちも、河原にたき火をして、天の邪鬼を火にかざしたり、淵に投げ入れたりして、「雨よ降るな」「雨はいらない」「水はいらない」と大声で唱えつづけました。

すると、なんと、なんと言うことでしょう。

極楽峠の方に黒雲が立ちこめたと思うと、たちまち空一面に広がり、大粒の雨がざあざあ降り出したではありませんか。

天の邪鬼は、村人の願いに応えて、干ばつの危機を救ってくれたのです。

皆は大喜びで、びしょぬれになりながら天の邪鬼を大事に持ち帰り、毘沙門天の元に返したのです。

天の邪鬼は、それから幾度も、小松原の危機を救ったということです。“

(『村の民話と伝説』編集委員会.(平成25年).『下條村の民話と伝説 第二集』.下條史学会.10-11 より引用)

【解説・コメント】

- 1 この昔話は長野県南信州地方の下條村しもじょうむらに伝わるもので、季節は夏です。日照りによる水不足に悩む農民たちが雨乞いを行うのですが、天邪鬼の特別な能力を利用し、ひねくれた性格を読むことによって、雨を降らせることができたというお話です。
- 2 雨乞い信仰は水利条件に恵まれない地域に多く伝えられており、舞台となった下條村の小松原地域も、水源や河川に恵まれない地形だったようです。^{※1}
- 3 詳しく書かれた方の『松源寺の天の邪鬼』には、当時の下條村の農村集落の生活、農村の意思決定の仕方、庄屋と農民の関係など、共同社会の様子が生き生きと描かれており、また、過酷な自然への向き合い方などがわかります。
 - (1) まず、人々が農業に従事する中、日照りによる干ばつに直面し、水不足の解決を図るため、村の皆で話し合いをします。皆で知恵を絞って解決策を探り、結局、天邪鬼の力に頼ることにしました。
 - (2) 庄屋は、人の思いとは反対のことをする天邪鬼の性格を知っていたので、雨乞いの場では、本心とは反対に「雨は降るな」と天邪鬼に手を合わせて唱え、村の皆も習います。そうすると、ねらいどおり、大粒の雨が降り出し、干ばつの危機を脱することができました。
 - (3) その後の干ばつの度に天邪鬼を信仰することで危機から救われたというものです。
- 4 この昔話では、天邪鬼の性格を読んだ上で、周りの人々が本心とは逆のことを伝えて願いを成就させます。第3章の他の昔話にはない、人の知恵と筋のひねりがあり、面白く味わいが増します。

佐伯区の「あまんじゃく伝説」において、道空が息子道裕に「津久根島に墓を立てて葬ってくれ」と伝えた計略と通じるところがあります。
- 5 なお、ここで登場する天邪鬼は、「雨を降らす」という、天気を操ることができる能力を有します。一般的な「姿や口真似を得意」とするレベルから考えると信じ難い能力ですが、『コラム①“天邪鬼”、その正体は・・・』に書いたとおり、「1年中しのぎやすい気候だったのを夏冬を作った」というほどの怪物ですから、驚くには当たらないでしょう。

ちなみに、同コラムで挙げた、あまのじゃくの5つの特徴と照合すると、「雨は降るな」と言われると「雨を降らせる」わけですから、「神や人に反抗して意地が悪い」という特徴に当たるかなと思います。

6 最後に、同地方には、出典は定かではありませんが、別の筋の話もあるようです。天竜という天邪鬼な性格の子どもがおり、村人が雨乞いに利用し、「雨降らね～」とささやくと、天竜は反対に「雨降れ～」と叫んでしまい、その後、すさまじい雨が降り、天竜は流されてしまいます。

ひとみごくう
一種の人身御供（いけにえとして人の体を神に供えること）の昔話といえます。

※1 『村の民話と伝説』編集委員会.(平成25年).『下條村の民話と伝説 第二集』.下條史学会.P42より引用・要約

